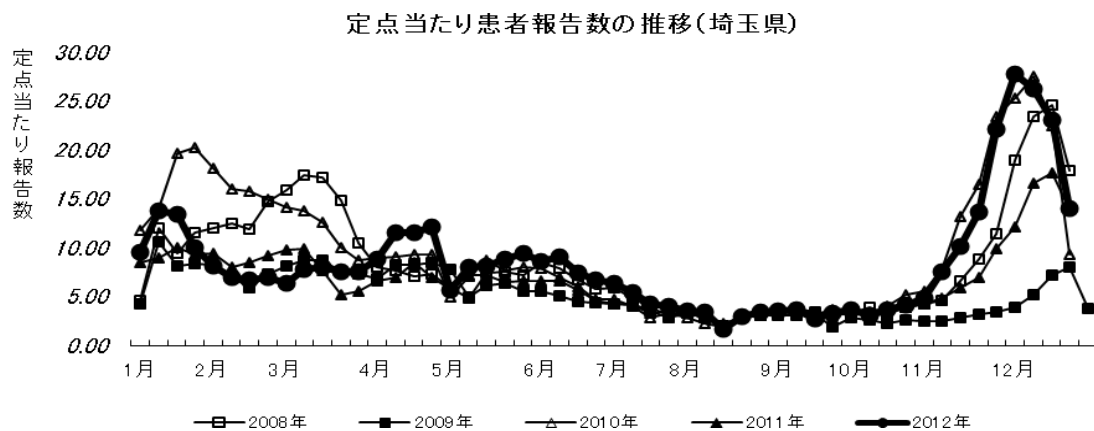


感染性胃腸炎

感染性胃腸炎は、冬期に流行する下痢及び嘔吐を主症状とする感染症です。様々な病原体によって起こりますが、ウイルス性の場合、主要な病原体はノロウイルスとロタウイルスです。

2012年は、前年に比べ患者報告数が大きく増加しました。第49週(12/3~9)には、定点あたり報告数27.8と、過去4年間の最大値を記録しました。埼玉県衛生研究所及びさいたま市健康科学研究センターに搬入された感染性胃腸炎検体(42検体)からは、ノロウイルスが15件検出されました。

2012年の流行には、G .4という遺伝子型のノロウイルスの変異が影響しているといわれています。G .4は以前から多く検出される遺伝子型でしたが、2012年10~12月は、G .4の中でも2012変異株と呼ばれる抗原性の異なる株が大流行しました。同時期に県内で検出されたノロウイルスは9件あり、遺伝子解析のできた8件のうち5件がこの2012変異株でした。残りの3件はG .2、G .3及びG .6でした。



ロタウイルスについては、2013年1~4月に感染性胃腸炎検体から計7件検出されました。また、脳炎・脳症の便検体からもロタウイルスが検出されています。

2013年10月14日から、現行の小児科定点における感染性胃腸炎の届出に加え、基幹定点におけるロタウイルスによる感染性胃腸炎が届出の対象となります。これは、重症例を中心にロタウイルス胃腸炎の発生動向をより正確に把握するとともに、ロタウイルスワクチン導入の影響を評価することを目的としています。

県内の流行状況を把握するため、基幹定点医療機関におきましてはロタウイルスによる感染性胃腸炎の、小児科定点医療機関におきましてはノロウイルス胃腸炎及びロタウイルス胃腸炎を含めた感染性胃腸炎の検体採取にご協力くださいますようお願いいたします。